

愛してると言いなさい
番外編
〜彼方へ〜



▲カトレー
ジークウィーンの側近。

▲アルディ
王妃付きの侍女を務める貴族の令嬢。カトレーとは恋人同士。

レット▶

▲ガロ

▲ケネス

▲ラヴェル

リゼの4人の弟子たち

▲ジークウィーン
ダスタ・フォン国の王子。紅緒に片想いしていたが、今は二人の仲を見守るように。

▲ルシター・スニ
リゼの旧友で、同じくダスタ・フォン国建国に関わった大魔法使い。

リゼ▶

ダスタ・フォン国建国にも関わった大魔法使い。恋人である紅緒との結婚を考えている。

さがらべに
▲相良紅緒
世界を行き来して結ばれたリゼの恋人。以前はジークウィーンの交際指南役を務めていた。

▲チビクロ
ベニオの愛猫。実は「最強の契約の猫」。

登場人物紹介

目次

愛してると言いなさい番外編	
〜彼方 <small>かなた</small> へ〜	
第一部 未来永劫の約束	8
第二部 幸福の翼	261
番外編小話 愛してると認めなさい	285
最終話 かけがえのない物語	293

愛してると言いなさい 番外編
↳ 彼方へ

第一部 未来永劫の約束

プロローグ

「結婚したいんです」

秋の三の月も二週目を迎え、紅葉も深まって来た頃——大魔法使いのリゼは一ヶ月ぶりに、ダスタ・フォンン国の王宮、クラヴ・サンバロウ・レンヴァルツ宮殿を訪ねた。

そして、すぐさま非常招集をかけて、いつもの仲間を呼び寄せる。

午後二時、第二書斎室。

最初は、ダスタ・フォンン国の王子ジークウイーンと側近のカトレーが「なにごとだ」という顔で駆けつけた。二番目に国王側近のダナン、三番目に王妃付き侍女のアルディに、リゼの恋人である紅緒ベニオの専任侍女を務めるジーチェ、次にリゼの四番弟子のラヴェルと一番長い付き合いの大魔法使いルシターがやって来た。それから少し遅れて、王妃カルバロツサと王太后アビオンが姿を見せ、最後に息せき切って現れたのが国王アワードだった。

冷たい眼でアワードを睨みつけたリゼは、握り拳で手元のテーブルをドンツと叩く。

「なんで、僕が呼んでいるのにすぐ来ないんです！」

「無茶を言うな！ 外交使節との面会中だったのだ。それでも急いで来たのだぞ」

「僕とその客と、どっちが大事なんです！」

「おまえに決まっておる！」

「当たり前です！ 今回は許しますけど、次から気をつけてくださいね」

「つ、次っておまえ……なんだその、妙なわがままは」

「僕、友達にはわがままを言っつて、頼ることにしたんです」

リゼは偉そうに胸を反そらした。

その横暴な主張に、アワードは二の句が継がないでいる。

二人の様子を見てクツと喉の奥で笑ったジークウイーンは、突っ立ったままのアワードに椅子を勧めてリゼに視線を向けた。

「それで？ いきなり訪ねて来て、私たちを呼び付けた理由は？」

リゼは、深刻な表情で頷いてみせて——そして冒頭のセリフに戻る。

「結婚したいんです」

直球で告げてきたリゼの言葉に、部屋の中はシンと静まり返る。皆の反応がないので、リゼは繰り返した。

「結婚したいんです」

「……すればよからう」と、ジークウイーン。

「祝福するよ」と、カトレー。

「おめでとうございますのー！」と、アルディ。

「結婚はいい。ぜひにもすべきた。ねえ、君？」と、ジーチェに手を伸ばしてグツと引き寄せるダナン。「あなた、こ、こんなところでやめて……」と、ジーチェ。

人目も憚らず、ダナンはジーチェの顎を軽く持ち上げてキスした。ジーチェが必死で押しつけようとするが、ダナンは大胆にもジーチェを膝の上に乗せて放さない。

「そこ、独り身の前で堂々と見せつけないでくださいよ！」

ラヴェルがそう怒鳴るが、どこ吹く風で澄ました顔のダナンは、もがくジーチェにキスの雨を降らせ続けている。

その桃色吐息な空気の一角を無視して、ルシターは勝手に柵から果実酒を数本持ち出し、勢いよく栓を抜いた。

「結婚したいって言ってもよ——おまえ、相手はどこよ？」

「そうですね。師よ、ベニオ殿はどうしたんです？ 結婚というなら、なぜ一緒にいらつしやらなかったんです」

ラヴェルが追及しつつ、人数分のグラスを手早く用意すると、ダナンの手を振り切ったジーチェがラヴェルを手伝う。

しかし、リゼが口を開くより先に、鼻で笑ったのはアビオンだ。

「どうせまた、あんたがなにかバカをして、ベニオを怒らせたんだろう」

アビオンは「およこし」と言っただけでラヴェルの手からひったくった瓶を、グビグビと喉を鳴らしながら傾ける。

そのたつぷりとした巨軀の横で優雅に微笑んでいたカルバロッサが、ゆっくりと羽扇を開いた。

「まあ、それは大変ですこと。では、わたくしが仲裁をして差し上げましょう」

「待って待って。まだそうと決まったわけではないだろう——どうなのだ、リゼ」

アワードが先を促すと、リゼはそっぽを向いてむすつと不機嫌そうに言った。

「別に、ケンカなんてしてませんよ。ただ、ベニオがこっちにいないだけです」

杯をテーブルに置いたジークウイーンが、眉を軽くひそめてリゼを眺めた。

「ベニオがいない？ どういうことだ」

「どうもこうも、向こうの世界で生活しているからです。僕の家に来るのは週末だけなんです」ジークウイーンの顔に信じられないという表情が浮かんだ。

「おまえたち、まだ離れ離れの生活をしているのか？」

「だーかーらー、結婚したいんです。ずーつとベニオと一緒に暮らしたいんです！」

見る見るうちに顔を歪めたりゼは掌を覆ったかと思うと、わーつと大声で泣き出した。そしてメソメソしながらテーブルに突っ伏す。

「うううう……結婚したい、結婚したい、結婚したいいいいい……」

「あーっ、鬱陶しい！」

その情けない態度に業を煮やしたルシターが、リゼの椅子に強烈な蹴りを入れた。勢いよく椅子ごと吹っ飛んだリゼが、無様な恰好で壁に激突する。

「あいたたた……」

ガツチリと腕を組んだルシターが、床に這うリゼを見下ろして怒鳴りつけた。

「あいたたた……じゃねえよ、このヘタレッツ！　なんでテメエの好きな女ひとり、嫁にできねえんだよっ」

即座にラヴェルが相槌を打つ。

「そうですよ！　あれだけ劇的に愛の告白をしておきながら、なんでまだ結ばれていないんです！　師よ、確認しますが、ベニオ殿にちゃんと求婚したんでしょうねえ？」

「してない」

「バカですか！　求婚もしないで結婚できるわけじゃないでしょう！　……あっ！　ま、まさかとは思いますが、婚前交渉もまだとか、そんなこと言いませんよね……？」

リゼは暗い顔で肩をすぼめて、小さくなった。そしてぼそりと呟く。

「……まだ」

「この……っ、ドヘタレ魔法使い！」

唸り上げて飛んできたラヴェルの拳を、リゼはもろに顎に喰らった。その衝撃は、リゼの身体が真上に吹っ飛び、天井にぶつかるところくらいだった。

ド派手な音を立てて床に転がり落ちたりゼは、顎を擦りながら怒鳴る。

「……このっ。クソ力のバカ弟子がつ！　いきなりなにするんだっ」

「バカはどこつちですか！」

鬼の形相でリゼに馬乗りになったラヴェルが、胸倉を掴んで激しく揺さぶりながら責め立てる。

「あの夜——　我らが上げ膳据え膳のお膳立てを完璧に整えてあげたじゃないですか！　にもかかわらず、なんでモノにできないんです！　理由を言いなさい、理由をっ」

向こうの世界に紅緒を迎えに行ったあの日。まだ仕事があると言って、紅緒は一緒にこちらの世界に帰らなかった。「できるだけ早く戻るから」と約束を交わし、リゼ達は先に帰されたのだ。

そしてその日の夜、紅緒はこちらの世界に来了。仕事が長引いたとすまなそうに詫言、「ただいま、リゼ」と柔らかい笑みを浮かべながら。

ごくありふれた言葉のやりとりが嬉しくてたまらない。無事の再会を果たせた喜びで胸がいっぱいになったリゼは、「お帰り、ベニオ」と言って心のままに紅緒を抱き寄せた。

そのあとは王宮で紅緒の帰還を祝うパーティが開かれ、関係者全員が無礼講に騒いで楽しんだ。疲労を理由に酒宴を中座したりゼと紅緒は、用意されていた部屋に向かった。王宮で生活していたとき、いつも二人が使っていた部屋。家具の配置もそのままだ。ひとつだけ灯された淡い明かりの下には、友人たちから贈られた色とりどりの花と果実酒……

リゼは紅緒と気持ちに通じてから、はじめて二人きりになったその夜のことを思い出して、ポツポツと語った。

「……途中までは、いい雰囲気だったんだ。長椅子に腰かけて笑いながら話してただけけど、間近

にあるベニオの眼が潤んじやつたりして、頬もほんのり赤くて、色っぽくて、かわいくってさあ……ほわーん」

直後、リゼはラヴェルからピシッとデコピンを食らった。

『ほわーん』はいいんですって！ とつとつと続きを話さないっ」

「うう……おまえ、師を敬ってないだろう」

「とんでもない！ 心から尊敬していますとも」

「そ、そうか？」

「ですが、それとこれとは別です！ さ、白状しなさい。なぜ進展しなかったんです？」

リゼは床にきちんと正座し、俯いて指をいじった。

「それから二人で酒を呑んだ」

「ふんふん、それで？」

「抱き寄せて、キスして……」

「ぼつちりです！」

「抱き上げて、ベッドに運んだ」

「よーし！ いいでしょう。それでっ？」

「ゆっくりと押し倒して、瞳を閉じて、今度は長いキスをして……気づいたら」

「気づいたら？」

「ベニオがぐっすり寝ていたんだ——！」

わーっ、とりゼは号泣した。

「……」と、眼を点にしたラヴェル。

「……」と、憐憫のまなざしを向けたアワード。

「くっ」と、最初に笑い出したのはジークウインで、彼に続きルシターが豪快に「あーっはっはっはっは！」と笑い飛ばしていた。

「そこ！ 笑わない！ 師がむごい目に遭ったんですから！」

「ベニオらしいな」

ジークウインは、笑すぎて涙が滲んだ眼元を拭いながら呟いた。

「お姉さまってば……」

「きつとお疲れだったのですよ」

さすがにリゼを哀れに思ったのか、アルディとジーチェがハンカチを差し出したり、背中を擦ったりと優しく接する。

それを見たカトレーとダナンはもちろん面白くない。嫉妬もあらわな表情でそれぞれアルディとジーチェの腰に腕をまわして、ひよいと自分たちの膝の上に乗せた。

「カトレー様！」

「あなた！」

顔を真っ赤にしたアルディとジーチェが抗議の声を上げて、おとなげない男まっしぐらのカトレーとダナンはそれを無視している。

カトレーはリゼを冷たく一瞥して言った。

「——それにしても、あれから一ヶ月も経つのにまだなんてね。酒宴のときは仕方ないとして、あれから何度も機会があったと思うけど、よもや、それをことごとく逃しているのかな？」

「ううう……」

カトレーが痛烈な皮肉をぶつけると、リゼは涙を浮かべて呻く。

「男とみなされていないのでは？」

「うううう……」

なにげない口調でダナンが厳しいことを口にする、床に正座したままのリゼはグスグスとしやくり上げながら泣き続ける。

先ほどからかなりみつももない様子をさらすリゼに、今度はジークウイーンが突っ込んできた。

「ところでリゼ。おまえ、結婚のしきたりがどういうものか知っているのか？」

「……しきたり？」

ポカンとして眼に涙を浮かべたまま、リゼは鸚鵡返しに訊ねた。

「この国で結婚するには、まず戸籍が必要だ。ベニオの戸籍がなければ、教会への結婚申請ができないだろう。申請が通らなかつたら、正式に夫婦とは認められんぞ」

ジークウイーンがそう言うと、カトレーが頷く。

「確かに。でもそれ以前に、ベニオ殿にはこの国の国籍もないのではないかな？」

「ということは、異世界人登録の法をつくらねばならんのう」

「結婚式も重要ですの！」

アルデイが横から口を挟むと、ジークウイーンが杯を叩き、「もつともだ」と言葉が続けた。

「教会で式を挙げるには、まずその教会に新郎新婦両名の戸籍証明書、立ち会い人、参加者名簿等、式の進行表を提出し、了解を得る必要がある。そして婚姻の宣誓をし、その後は戸籍証明書、婚姻届、誓いの指輪を持参の上、二人の証人を伴いその場で署名をしなければならない。そうしてはじめて夫婦と認められるんだ」

リゼの顔からざーっと血の気が引いていく。

「そ、そんなに大変なのか」

空になった酒瓶を振りながらニヤニヤしていたアビオンの言葉が、最後にリゼを打ちのめした。

「他にも新婦の改名や新居の住所登録なんてのもしなきゃならないねえ。どれも結婚には必要な手続きだよ。はたしてあなたに全部できるかねえ。によっほほほほほほー」

「うっ……」

無理だ。できるわけがない。

リゼはそろりとラヴェルへ視線を移し、助けを求めてみる。しかし、ラヴェルは「私だってそんな結婚の手続き云々などできません」という引き攣った顔でブンブンと首を横に振っている。

そこへ、ジークウイーンが救いの手を差し伸べてきた。

「まあ、そのあたりのことは、私がうまく取り計らうから良しとして——」

「ジーク！」

リゼはガバツとジークウイーンに抱きついた。感極まった様子で、ジークウイーンの背中をバンバンと叩く。

「ありがとうございます！　ありがとうございますっ、恩に着ます！」

「い、いや……ゴホッ」

リゼのあまりの勢いと力の強さに、ジークウイーンは眼を白黒させて咳き込んだ。
「……見ましたの」

ちよこん、とカトレーの膝に横座りしたまま、アルデイがほうつと呟いた。

「あのリゼ様がジーク殿下に飛びつきましたの。びっくりですの」

アルデイを抱きしめていた腕にさりげなく力を込めたカトレーが、微笑んだ。

「そうだね。いままでなら考えられない態度だ。……なにか心境の変化でもあったんだろうね」

ダナンの杯におかわりを注いでいたジークチェも、声を弾ませた。

「リゼ様は以前よりずっと親しみやすくなりましたね。まるでベニオ様に接するときのように、私たちの前でも自然体でいらっしやいます。なんだかとても……嬉しいです」

優しい空気が広がって皆の顔が綻んだが、いまのリゼはそれどころではなかった。借りてきた猫のようにおとなしく椅子に座りながら、ジークウイーンのアドバイスに必死で耳を傾けている。

「旅行？」

「そうだ。ベニオと二人で、旅行にでも行って来い」

「なんで？」

「なんで？　じゃない。おまえのことだ、ろくにベニオを外に連れ出していないのだから。まずはこの世界の色々な国を見せてやれ。その上でベニオに結婚を申し込め。自分が住むことになる世界についてなにも知らないのに求婚されても、了承しづらいだろう」

「それは名案です！　師よ、ぜひそうなさい！」

ラヴェルがパチパチパチと拍手して同意を示す。

だが当のリゼは困って俯き、指をいじっている。

「で、でも……旅行って、なにをするんだ？」

その疑問に対するラヴェルの答えは単純明快だった。

「簡単に言えば、お泊まりデートです」

「なにっ！　お泊まりデートだどっ？」

「そうです。おいしいものを食べて、名所を巡って、二人でイチヤイチャするんです！」

「イチヤイチャか！」

ヒュウツと口笛を吹いたルシターが、眉を吊り上げてニヤリと笑みを浮かべた。

「知らない土地で二人きりの夜。盛り上がるぜえ？」

「も、盛り上がる……」

リゼはゴクリと息を呑む。

するとラヴェルが、リゼの耳を引っ張って口を寄せ、とどめを刺した。

「……普段とは違うベニオ殿の顔が見られますよ。もしかしたら、甘いおねだりとかされちゃう

「かもしれませんよっ」

「行きますっ！ ベニオを連れて世界旅行に行ってきますっ！」
すっかり興奮したりぜは、元気を取り戻して大きく拳手した。

ジークウイーンが笑って、すっくと掌を前に差し出す。

「よし、行って来い！」

「はいっ」

パチンツと、リゼとジークウイーンの掌が重なり合う。

リゼはさっそく部屋を出て行こうとしたものの、その襟首をクイツとラヴェルに摘まれる。

「ちよーつと待ったああああ！ 師よ、行くあてはあるのですか？」

「えーと、……ない」

ラヴェルが深いため息をつく。「まったく世話が焼ける」とブツブツと呟き、こめかみを押さえながらリゼに進言した。

「兄弟子のもとに寄って顔を見せがてら、四ヶ国を周遊すればよろしい」

「なるほど！」

リゼにはラヴェルを含めて四人の弟子がいる。

西イヴルに一番弟子ケネス・ミード。

東ゲノーシズに二番弟子ガロ・ファニーノ。

南レナンネイに三番弟子レット・バーズ。

北エバアルに四番弟子ラヴェル・イングレッサ。

それぞれが各国の宮廷魔法使いの職に就き、不測の事態に備えている。ただしラヴェルは北エバアルを守護しながら、王都ラツセンシエルにおけるリゼの代理も兼任中だ。

するとこれを聞いたルシターが、とんでもないことを言い出した。

「へえー。そりゃいいや。なあ、俺も連れて行けよ。三人で仲良くまわろうぜ」

「なっ！ だ、だめです！ 冗談じゃありませんよ。僕はベニオと二人きりがいいんです！」

「ケチケチすんなよ。邪魔しねえからさあ」

「だめだったらだめです！ ぜーったい、ついて来ないでくださいねっ」

リゼが真顔で拒否すると、ルシターが「ぶーっ」と噴き出した。

「ばーか。誰がんな野暮なことするかっての。ついて行きやあしねえよ。安心して口説いてこいて。ほら、とっつと行け！」

ルシターが荒っぽくリゼの背を押す。

その勢いのまま扉の前まで進んだリゼに、次々と賑やかな声がかかる。

「行ってらっしゃいませですのー！ お姉さまによろしくですのー」と、アルディ。

「道中お気をつけて」と、ジーチェ。

「おまえが戻るまでに結婚式の準備を整えておいてやる。楽しんで来い！」と、ジークウイーン。
リゼは満面の笑みを浮かべて元気よく頷き、皆に大きく手を振り返した。

「行ってきますっ！」

遊覧飛行には最高の秋晴れだった。

紅緒に世界周遊の話を持ちかけたところ、二つ返事で了解してもらえた。肝心の移動手段については、転移魔法よりもゆつくりと竜で飛行する方が旅らしいと言われたので、そうすることにした。天高く、青い空がどこまでも澄みわたり、そよぐ風は気持ちいい。燦々と射し込む光は暖かく、空の旅には申し分ない陽気だ。

双頭の竜テスとサジェの翼はうまく気流をとらえ、ほとんど羽ばたくこともなく風に乗っている。時折通る薄い雲の峰の他は、行く手を阻むものはなにもない。悠々快適だ。

リゼは紅緒を脚の間に座らせ、安全確保を理由にしっかりと抱きしめていた。

「リゼ、あんまりくつつかないで」

「いやだ」

「いやだじゃなくて。……ン、もう。スイカリングが食べたいって言ったの、リゼでしょう。そんなにきつく抱きつかれていたら皮がむけません。ちよつとだけ放してください」

「はあい……」

リゼは紅緒に従って、渋々ながらほんの少しだけ腕をゆるめた。紅緒は手元の大型バスケット

からスイカリングという黒と緑の縞模様の果実を取り出して、果物ナイフを器用に動かしはじめた。ご機嫌なのか、鼻歌交じりでシュルシュルと皮をむいている。

「風が気持ちいいね」

「うん」

「楽しいね」

「うん！」

紅緒が肩越しにリゼを振り返って言う。

「旅行に誘ってくれてありがとう、リゼ」

紅緒の嬉しそうな笑顔を見たリゼは、旅行を勧めてくれたジークウインに心から感謝した。

正直、旅行に誘ったところで、紅緒がすんなりと了承してくれるとは思っていなかった。紅緒が週末に向こうの世界とこちらの世界を行き来する生活は昔からだが、最近は少し疲れているように見えたからだ。断られるのを覚悟して話を持ちかけてみたところ、意外にも紅緒は喜んで承諾してくれた。仲間たちには山ほどお礼の土産を買って帰ろうと、リゼは心の中で強く誓った。

「はい、どうぞ。召し上げれ」

紅緒は、サクツとフォークに刺した白い果肉を口元に運んでくれる。その優しさに、リゼはジーンと胸が熱くなった。

「いただきますー！」

「……どうかな？ 甘い？」

「うんっ。君がむいてくれたから、よりいっそう甘くておいしい！ あー、おいしくて幸せー」
「おおげさなんだから」

クスクスと笑う紅緒に、リゼはほわーんと見惚れた。紅緒は、誰がなんと言おうと世界一かわいい。優しい瞳も小さな唇もふっくらした頬も白い喉も、食べたくなるくらいだ。

「キスしたいなあ……」

「え？」

「う、ううん。な、なんでもない」

「変なりゼ」

クスリと笑った紅緒は首を伸ばし、「ちゅっ」とリゼにキスをしてきた。一瞬だけ重なった柔らかい感触に、リゼは茫然となる。すると紅緒は恥ずかしそうに手で顔を隠し、ぽそつと呟いた。

「……キスしたくなっちゃったの。ごめんね、いきなり」

そのあまりのかわいらしさに、リゼの全身の血管は一気に膨張し、心臓が破裂するかと思うほどドキドキした。こらえきれずにバタツと大の字にひっくり返る。

「きやあつ。リゼ、どうしたの？」

「……ど、どうもこうもないだろう。かわいい、かわいいすぎる、無茶苦茶かわいすぎる……僕を殺す気か……っ！ あーくそつ、なんでそんなにかわいいかなあー」

リゼはそう呻くと紅緒の手首を掴み、華奢な身体を強引に引き寄せた。

「わー！」

「あのねえ、そんなに無防備にかわいいこと言っていると、襲うよ？」

「……だめって言ったら？」

「だめって言っても」

「……じゃあ、いいよって言ったら……？」

「ぶーっ。げほげほっ、げっほ、げほげほげほっ！」

予想もしない紅緒の返答にリゼは激しくむせた。水を飲んでもしばらくおさまらず、なんとも恰好がつかない。

「あの、大丈夫、リゼ？」

「だ、大丈夫だけど、大丈夫じゃない……」

「どっち？」

「どっちも……げほげほ」

紅緒は心配そうな表情で、咳き込むリゼの背中を優しく擦る。残念なことに少し前までの甘い雰囲気は消し飛んでしまった。

それまでテスの頭の上でおとなしくしていた紅緒の愛猫チビクロがひよこっど現れ、リゼの醜態を嘲笑うかのように、「に」とひと声鳴く。飼い主である紅緒の手に甘えて擦り寄るしぐさすら挑発的に見える。

「チビクロとテスとサジェにも、スイカリンゴ、むいてあげるね」

「にー！」

なんで肝心なときに、いつつもこうなんだ。

リゼは心の中でそう悪態をつけてみるものの、後の祭りである。

紅緒は愛猫と双頭の竜にスイカリンゴの差し入れをしたあと、ふてくされているリゼのもとに戻ってきた。さきほどの艶つぽさはどこへやら、子供のような無邪気さで訊ねてくる。

「はじめはどこに行くの？」

リゼは答えた。

「東ゲノーシズ。次に南レナンネイ、西イーヴル、北エバアルの順でまわろうと思っっているんだ。僕の弟子達を紹介するよ。それで最後は北エバアルの僕の家に行こう」

「リゼの家？」

リゼの横に座った紅緒が腕を絡めてくる。その左肩の定位置にチビクロがわがもの顔で丸まっているのは気に入らないが、ここは目を瞑ることにする。紅緒の髪からほんのりと甘い香りが漂ってきて、リゼの鼻孔をくすぐった。さりげなく紅緒の肩を抱くことに成功したリゼは、心の中でグツと拳を握る。

「いまは管理人の他には誰も住んでいないけど、昔、ルシターと弟子達とで一緒に暮らしていたんだ」「行きたい。すごく楽しい」

「そんなにたいそうな家じゃないよ。古いし、狭いし、面白いものもない」

「いいの。リゼがどんなところでどんなふうに住らしていたのか、直接見てみたいの」

紅緒はポテツとリゼの肩に頭を預けてきた。口元が柔らかく綻んでいるのを見て、リゼの顔も自

然とゆるむ。紅緒が笑えばそれだけで気持ちがあふわつと軽くなるのだから、不思議だ。

——天下無敵の大魔法使いも形無しよ。

——まったく縮まりのない顔だ。

双頭の竜のからかうような言葉をリゼは平然と受けとめた。

——なんとも言え。幸せなものは幸せなんだ、邪魔するな。

くぐもつた咆哮が響く。どうやら珍しいことに、テスとサジェが笑い声を放つたらしい。

それと同時に、彼らの翼が大きく羽ばたく。高速移動がはじまって、ぐんぐんと速度が上がる。

紅緒が怖がるかと思つたが、楽しそうな顔をしているのでホツとした。吹き飛ばされないようにリゼにひしつと掴まるしぐさが、またなんともかわいらしかった。

徐々に高度を下げ、白い大雲海を突き抜ける。

「リゼ、見て」

紅緒が遙か眼下を眺めて指をさす。

その先には、壮麗な建造物が夥しく連なっているのが遠目にも見てとれた。特に大小様々な尖塔と丸いドームが目立つ。さらに集合住宅や切妻屋根の家屋などが四角い枠の中にきれいに列をなしていた。

「東ゲノーシズの首都、サイレンだよ。ここは基盤の目状に道路を奔らせ、計画的に造られた都市なんだ。だから建物はたくさんあるけど、実際は道もわかりやすいんだよ。芸術の都とも呼ばれていて、才能のある芸術家が国家の依頼を受けて、街の建設を手伝っている。美と調和をなにより

も重要視するから、街全体が美術館みたいになってるんだ」

「あとで案内してくれる？」

「もちろん！ 気候も穏やかだから過ごしやすいし、食にもこだわる国なんだ。皆舌が肥えているから、食材も豊富で調理法だって様々さ。きっと君も気に入ると思う。ただ——」

「ただ？」

「うん……そのう、この国の人たちは、ちよつと熱血思考なところがあるんだ。熱しやすく冷めにくいっていうのかな、だから気分が高揚するとあちこちで大騒ぎになる。巻き込まれると長いから、そのときはさっさと逃げよう」

真面目な顔をするリゼを見て、紅緒はクスツと笑った。

「巻き込まれて、それで大変な目に遭った経験があるの？」

「うん」

あるなんてものじゃない。

大魔法使いとして顔が売れているリゼは、訪問するたびに派手な歓迎を受けていた。どこへいっても揉みくちやになり熱烈に歓待されるので、解放されるころにはへ口へ口になってしまふのだ。

でもまあそれは、いまは言わないでおく。

「ほら、あれが王宮」

リゼが指し示したのは一際広大な敷地に造られた横長の宮殿だった。青い外壁が特徴的で、建物の前には長方形の大庭園が広がり、その中央には温室のようなものも見える。

「横に長いよね」

「高くすると階段を上るのに疲れるって言い放った横着な王のせいさ。あそこに僕の二番目の弟子が宮廷魔法使いとして常駐している。ベニオも一度会ったことあると思うけど」

以前、恋人を喪つて狂気に陥つた大魔法使いルシター・スニを正気に戻すため、リゼはルシターと戦った。激しい攻防の末、なんとか彼の眼を醒ますことには成功したものの、リゼは力を使い果たして危篤状態となつてしまったのだ。その際、危急の知らせを受けて駆けつけた三人の弟子たちが魔力を補填し、リゼの命を救ったことは記憶に新しい。その場にいた紅緒も、おそらく顔を合わせているはず。

「ん……でも、あのときはリゼが心配で挨拶もできなかつたから、今度はきちんと紹介して欲しいな。二番目のお弟子さんって、どんなひと？」

「口で説明するより実際見た方が早いよ。いまからすぐ会いに行こう。おいで！」

リゼは紅緒の膝裏に手を通しサツと抱き上げると、竜の背からはるか下にある王宮へと飛び降りた。ヒューツと風を縦に切り裂いて降りていく。紅緒は垂直降下が怖いのか、身体を硬くしてきつく眼を瞑っていた。

降りていく間、リゼは呪文を唱え、空をロマンティックに演出する光の魔法をかける。

「ベニオ。まわりを見てごらんよ、きれいだから」

「……きれいな？」

紅緒はおそるおそる眼をあけ、ついで感嘆の声を上げる。

空には二重、三重、四重、五重、六重——と様々な大きさの虹の橋が架かっていた。

「わあ！ 大きな虹」

「気に入った？」

「すごい、すごいよリゼ」

紅緒が予想以上に喜んだので、リゼは嬉しくなって空を虹で埋め尽くした。

「——ベニオ」

「うん？」

「あの……僕、あとで君に大事な話があるんだ」

紅緒の顔がやや強張る。少しの沈黙のあと、紅緒は頷いてから口を開いた。

「私も……リゼに話があるの」

「僕に？」

「いますぐじゃなくていいの。リゼの話が終わったあとでいいから——私の話も聞いてくれる？」

「わかった」

話とはなんだろう。疑問に思ったものの、この様子ではすぐには答えてくれないだろう。若干不安を残しながらも、リゼはなんとなくギクシャクしてしまった雰囲気をもとに戻そうと、わざと明るい声を上げた。

「これは、おまけ」

ふうっ、とリゼが虹に向かってひと息吹きかけると、リーンと鈴のような音が響く。音色はいっ

までもこだまして、その美しい旋律はリゼ達が地上に着くまで途切れることがなかった。

そして、二人は王宮手前の広場に舞い降りた。奇しくも、救国の英雄像——リゼとルシター二人の実寸大の大理石像——の前に降りたので、その場にいた群衆の注目を一身に集めた。

「……まずい」

かなり目立っている。浮かれていたため、思わず街のど真ん中に着地してしまったが、地味にこっそりと降りるべきだった。だが後悔しても、もう遅い。

次の瞬間、大地を震わせるような大歓声が湧き上がった。

「リゼ様だ！」

「リゼ・クラヴィエ様のご到着だ——！」

ワアアアアッとひとびとが歓喜の声を上げたかと思ったら、今度はリゼに向かって押し寄せてきた。

「逃げよう！」

咄嗟に紅緒を腕にすくい上げてまわれ右をしたリゼは、街中へと走り出す。次の瞬間、まっすぐ

王宮へ駆けこむほうが早かったということに気がついたが、いまとなっては手遅れだ。

「リゼ！」

「なに？」

「私たち、どうして追いかけられるの？」

至極当然な疑問だ。リゼは疾走しながら周囲に視線を巡らせた。あちこちにリゼの精巧な似顔絵が貼り出され、リゼの名を記した垂れ幕が住宅のペランダや店先に掲げられている。中には、宮廷魔法使いの正装姿のリゼを描いた横断幕が外壁にかけられているところもあった。

「たぶん、僕の弟子があることないこと吹聴したんだと思う」

背後に迫る足音と気配が次第に膨れ上がっていた。このままでは追いつかれるのは時間の問題だろう。いつそのこと浮遊魔法で空に逃げてしまえばよかったのだが、このときのリゼは焦るあまりそんなことすら思いつかなかった。

「リゼ、あの角を曲がってどこかの路地裏に入ったらどうかかな？ それでしばらく隠れてやり過ぎようよ」

紅緒に言われるがままに角を曲がる。路地裏に入ったところで、ちょうど扉の開いていた店に飛び込み、勢いよく扉を閉めた。

「い、いらつしやいませ」

大きな物音に驚いたのだろう、店の奥から店主と思われる初老の男性が慌てた様子で出てきた。彼はリゼの顔を見てさらに驚いたようだった。

「リゼ・クラヴィエ様……？」

「しーっ。追われているんだ、少しだけ匿かくまってくれないか」

「は、はい」

店主の行動は素早く、二人を奥へと促すと、さっと扉に内鍵をかける。

「どうぞお座りください。いま、冷たい飲みものでもお持ちしましょう」

二人とも示されたソファに並んで座り、ほっとひと息つく。紅緒がハンカチを取り出して、リゼの額の汗を拭いてくれた。

「守ってくれてありがとう」

「いいんだ。僕こそ、なんだか迷惑かけちゃって……着いた早々こんな……」

とんだ騒動に巻き込んでしまったと、リゼが肩を落とすと、紅緒が下から顔を覗のぞき込んできた。

「私はちょっと楽しいけど、リゼは違うの？」

「楽しいだつて？」

「うん。びつくりしたけど、迷惑だなんて思っていないよ」

思いがけない紅緒の言葉にリゼが面食らっていると、店主が冷えたお茶を運んで来てくれた。礼を言つて喉を潤うるおす。生き返るようだ。

「つかぬことを訊きくけど」

「はい、なんでございましょう」

「どうして僕の顔があちこちに貼り出されているんだ？」

「首都ラツセンシエルの魔法研究所で、大陸全土を脅おびやかす大規模な魔法事故が起きたとき、リゼ・クラヴィエ様が一命を賭として危機を救つてくださったと聞きました。それで近々諸国を訪問されるので、お会いしたら謝意を述べるよう、宮廷魔法使いガロ・ファニーノ様より通達されております」
リゼは紅緒と顔を見合わせた。ルシター・スニの一件はアワードに事後処理を頼んでいた。彼は

魔法研究所所長のローザン・ヘルノと話し合い、民に動揺が広まらぬよう、各国には無難な理由を説明しておいたとは言っていたが……

紅緒がクスツと笑い、リゼの耳に口を寄せて囁く。

「そういうことでいいじゃない」

確かに、過去の人間であるルシターが実は生きていたと今更明らかにしたところで、いいことはない。むしろ、面倒な問題が続々と出てくるだろう。それならばいっそ、真実は伏せておいた方がいい。

「ん……そうだね」

「じゃあなんとか頑張つて、王宮に辿り着かないと。ねえ、変装とかどうかな？」

「へんそう？」

「変装。ここ衣料品を扱うお店みたいだから、できるんじゃないかなあ？」

ここでようやく、店主が商売人らしいセリフを口にした。

「ウィッグに帽子、小物類なども合わせて取り扱っております」

紅緒がリゼの服を見立て、リゼが紅緒の服を見立てて変装することにした。ああだこうだと何回も試着を繰り返した末に、リゼは真紅のラミザイに黒いベルト、髪をオールバックにしたワイルド系。紅緒は胸元の開いた黒いサラエンに真紅の飾り紐を結び、髪はアップにまとめて艶つぽさを前面に押し出すような服装にした。

「……」

「……」

どちらも見慣れない姿に戸惑いを隠せず、気恥ずかしい様子で向かい合ったまま黙り込む。すると店主がニコニコしながら手を叩いて称賛した。

「これは見違えましたね」

「にー!!」

チビク口は紅緒の変装を褒めているかのように、尻尾をはたはたと振っている。

「あの……」

自分もなにか言わなければ、と紅緒をチラツと見たリゼはゴクリと唾を呑み込んだ。白い胸の谷間が凶悪だ。おまけにサラエンの深いスリット。脚が色つぽすぎる。

「……っ」

リゼは片手で顔を覆った。だめだ、直視できない。いますぐこの場で押し倒したい。

そこへ、紅緒の照れを含んだ声が耳に届く。

「リゼ、かっこいい。そういうのも似合うね。ちよつと見慣れなくてドキドキする……」

「なに言ってるの！ 君こそ過激にかわいくて、超絶美しくてウハウハするほど色つぽくて、頭が痛いほど悩ましいじゃないか！ どうしよう——ドキドキなんてものじゃないよ、僕はときめきすぎて胸が苦しいよ。死にそうだ！ あーっ、なんでこんなに美人かなああああああああっ！」
四つん這いになって絶叫するリゼを、紅緒が腕を引いて起こした。

「それ、褒めすぎ。ンもう、恥ずかしいじゃない。ほらほら立って、そろそろ失礼しょ？」

「君がなんでも似合うのがいけないんだ……」

「それはリゼの欲目です。でも、たまにはこんな恰好も新鮮で楽しいね」

キラキラと輝く紅緒の瞳がなんとも言えずきれいで、リゼは眼を細めた。

「……口紅、はみ出てる」

リゼは紅緒の口の端を指で優しく拭った。そのまま屈んで唇を奪う。

「王宮に行く前に、ちょっとだけ寄り道していいこうか」

「……デート？」

「そう。変装デート。普段の僕たちらしくないことをしよう」

「たとえば？」

「歩きながらキスしたり、とか」

リゼが紅緒の様子を窺うと、紅緒は顔を赤らめてはいるものの、満更でもなさそうだった。

「……腕を組んで歩いたり、とか？」

「ぜひともそれでお願います！」

紅緒の返事に、すっかり舞い上がって支払いを済ませたリゼは、店主に礼を言っただけで意気揚々と店を出る。ふと思いついて、リゼは紅緒に訊ねた。

「どこか行ってみたい場所はある？」

伝統と格式を重んじ、かつ芸術性に優れ洗練されたサイレーン。ラッセンシエルとはだいぶ異なるので、紅緒はしばらくその街並みをもの珍しそうに眺めている。そしてリゼに視線を戻し、左肩

の愛猫の頭を撫でながら、ちょっと考えるしぐさを見せた。

「リゼのおすすめは？」

「ここから少し離れているけど、ミュロワっていう街にある薔薇屋敷かな」

「そこに行きたいです」

「じゃあ行こう！」

「にー」

移動は魔法か公共交通機関かと訊ねると、紅緒は迷うことなく後者を選んだ。気の良さそうな御者が操る辻馬車に乗り込むと、郊外へと向かう。土産屋や飲食店が軒を連ねる大通りを通り、どっしりとかまえる西門を抜ける。煉瓦造りの民家が立ち並ぶ街道をしばらく進むと、ゆるやかにカーブするシャーロフ川に出た。透明な川の水は秋の静謐な光に照らされ、ゆったりと流れて行く水面は穏やかで美しい。

リゼがそっと紅緒を窺うと、馬車の窓に額をくつつけるようにして外の景色を眺めている。眼をキラキラさせている横顔は無邪気かわいらしい。見ていてまったく飽きない。

リゼはひそかに息を詰めて、拳を握った。

時折、怖くなる時がある。こうして傍に居る間はいい。だがもしも紅緒になにかあれば、とても生きてはいけない——

こんなこと、君には言えないけれど……と、リゼはそんな言葉を胸の裡でそっと呟いた。

まもなく人家がまばらになり、こんもりと生い茂る緑の樹木が増えた。馬車はのどかな田園風景の中を進み、やや陽が傾いた頃、目的地であるミュロワの薔薇屋敷に到着した。

馬車を降りた途端、眼の前に飛び込んできた光景に、紅緒は息を呑んだ。

「……すごい……！」

一面の薔薇の海だった。赤、ピンク、白、黄色、オレンジ、紫、緑、青——ありとあらゆる色の薔薇が咲き乱れ、大地を埋め尽くしている。手前に建つ三角屋根の白い館は薔薇に埋もれ、華麗な景色と見事に調和していた。

日暮れ間近のやや冷たさを孕んだ風が、さあっと大地を滑るように通り過ぎていく。花びらが舞い上がり、リゼは甘い薔薇の香りでむせそうになった。

しばらくそうして目の前の景色に見惚れていたリゼは、ふと手に温かみを感じた。見ると、紅緒の華奢な指が絡んでいる。紅緒の顔に視線を向ければ、やわらかい微笑みが眼に入った。

「ありがとう、リゼ。こんなにきれいな風景を見せてくれて」

細められた瞳に喜びが満ち溢れている様子に、リゼの胸は打ち震える。

リゼは、少し力を込めれば壊れそうなほど小さい紅緒の手を握り締めた。

「……君が喜んでくれて、僕も嬉しい。こっちに散策路があるんだ、少し歩こう」

リゼは紅緒と手を繋いだまま、細い小道を歩いた。

ミュロワの薔薇屋敷は、春から秋までの薔薇の開花時期に限り無料で一般開放されていた。既に日没間際だったが、赤い残照に輝く薔薇の海を一目見ようという観光客で、敷地内は賑わっている。

チビクロは紅緒の左肩から降りてテクテクと前を進む。たまに垣根に突っ込んで姿を消しては、また顔を出し、トンボに飛びかかったり、花びらを囓んだりしていて楽しそうだ。

「この庭園は、初代当主が薔薇好きの病弱な妻のために造ったのがはじまりなんだ」
ゆつくりと歩く紅緒に歩調を合わせながら、リゼは話を続ける。

「ここまで大規模な薔薇園になったのは、二十年ぐらい前。四代目の当主だったアルゴーが、愛妻ベアトリツタから『私への愛の数だけ薔薇をちょうだい』とねだられて、『よし、それならば』と、大陸中から数年がかりであらゆる品種の薔薇を集めた。だから別名、『愛の庭』とも呼ばれている。その後、夫妻の厚意もあって、一般開放されるようになったんだ」

西日を浴びていつそう輝きを増す薔薇を眺めながら、紅緒はうつとりと呟く。

「愛する奥さんのためになんて、素敵ね」

「君もこんな庭が欲しい？」

「ううん。私はリゼがいれば、それでいい」

紅緒の口からさらっと出た言葉に、リゼはグツときた。だらしなく頬がゆるむのを見られたくなくて、空いている方の掌ですくさま顔を覆う。

「あのさあ……そういうこと素で言うの、反則だと思う。ううう、かわいい……」

時折、紅緒はすごい殺し文句でリゼを煽るのだが、本人はどこまでも無自覚だ。

いまでも涼しい顔で、ふつくらした青薔薇の花びらの輪郭を指先でなぞっている。

その横顔がリゼはとにかく愛しかった。赤い夕陽に照らされる紅緒は、たまらなく美しく見える。

「あのね、これでもしかして、蒼カルクエナダの夜に、リゼが私にくれた青薔薇？」

「うん。永遠の愛を誓う薔薇だよ。蒼カルクエナダの夜の定番の贈りもの。あ、でも、誤解のないように言っておくけど、僕は今まで誰にもあげたことないから！ 君がはじめてだから！」

この世界では、夏から秋にかけて『蒼あお』という三日間だけの特別な季節が大陸ケルトライ全土に訪れる。

蒼い闇に覆おほわれ、蒼月が昇る夜のことを蒼カルクエナダの夜と呼び、恋人達には一年で最も大切な夜となる。

青いものを身にまとい、愛するひとに青薔薇あおばらを贈って愛を囁ささやくという、二人の絆が深まる夜だ。拳を握とって力説するリゼに、紅緒が熱い視線を向けてくる。

「好き」

「は？」

「リゼが好き」

いきなりの告白にぶったまげて、リゼは無様にすっ転んだ。なにもないところで躓つまずいて倒れたので、恰好かっこう悪いことこの上ない。だが本人以上に紅緒の方が驚いたらしく、慌あわてて起こしてくれた。

「大丈夫？」

「大丈夫じゃないよ！ なんなんなななっ、なにっ、いきなり？」

「急に言いたくなつたの。いけなかった？」

「い、いけなくはないけど……っ」

僕を殺す気か！ とは言わず、リゼは胸を押さえて必死ひつじに動悸どうきを落ち着かせつつ、自分の気持ち
を伝えた。

「嬉うれしくて死にそうです。心臓止まるかも……いやいや、いまは死にたくない、死んでたまるか。あー、びっくりした。けど、無茶苦茶感激した。僕も、君が大好きです！」

「ありがとう。私ね、リゼのことが大切。すごく大事なの……どうしよう、好き」

ちよっぴり照れくさそうに眼元を赤らめ、手を頬にあてる紅緒は凶悪にかわいい。

「僕も大大大大好きです！ 天より高く、海より深く、薔薇もかすむほど君を愛してる！」

興奮するあまりリゼが大声で叫んだので、周囲のひとの注目をぼつちり集めてしまった。だが、そんなことはかまわない。大胆に紅緒を引き寄せて、胸にぎゅつと抱きしめる。

「や、やだ。リゼ、離して。皆見てるじゃない」

「だめ」

「恥ずかしいですよ」

「僕は恥ずかしくない」

羞恥しゅうちのためか、紅緒はなんとかリゼの腕のうでから逃れようともがいたが、リゼは力をゆるめない。紅緒の髪に顔を埋まめ、低い声で囁ささやく。

「まいった……完全にやられた。言っておくけど、僕の頭がおかしくなったら君のせいだ。本当に君のことが好きすぎて、気が変になりそうなんだから」

夕陽に酔う。恋に酔う。薫りに酔う。紅緒に酔う。——世界はまさに薔薇色だ。

リゼはくらくらしながら、紅緒の華奢きゃしゃな身体をいっそう強く抱きしめて、一心に告げた。

「愛してる……君は？」

紅緒の身体が震える。しどろもどろの掠れた声が、リゼの耳に届く。

「そ、それは、わ、私も……」

『私も』、なに？ 続き、聞かせて欲しいな」

「だ、だから、私も……その……ンもう、リゼのイジワル……」

首まで真つ赤にして俯く紅緒が愛おしくてたまらない。

リゼは少しだけ腕の力をゆるめ、紅緒の耳もとに唇を寄せて優しく迫る。

「イジワルは君だろ……言つてよ、聞きたいんだ」

「あ……愛して、る。私も、リゼのこと……きゃあつ」

たまらず、リゼは紅緒の顎を上向かせる。強引に口を塞ぐと柔らかな唇を割り、舌を差し込む。自分を刻みつけるように、何度も何度も思いのまま口づける。

紅緒は焦った様子で身体を引こうとしていたが、リゼが深いキスを繰り返すうちに少しずつ緊張がほぐれていき、最後にはキスに応えるようになった。

「……さつき、君が僕のこと好きって言ってくれて、嬉しかった。本当のことを言うとき、僕も君に見惚れていて、きれいだな、好きだなんて思っていたんだ。だから君と気持ちを通じたみたいで嬉しくて、つい……あーでも、外でよかった」

リゼは真紅に染まる空を仰いで、「はーっ」と大きな溜め息をつく。

すると紅緒が訝しそうに首を傾げて、リゼのラミザイの袖をクイツと軽く引っ張った。

「なにが『外でよかった』の？」

「だって、ここじゃさすがに押し倒せないし、あんなことやこんなこともできない——って、いまのなし！ 聞かなかったことにしてください！」

うっかり出した本音はすぐに取り消したものの、紅緒の冷やかな視線に射抜かれる。

「……チビクロ、出番です」

「にー！」

紅緒の低い声を受け、まかせなさいと言わんばかりにチビクロが飛びかかる。リゼは鋭い爪の攻撃に遭った。

「いてっ。いてててっ。うわっ、顔はやめる、この、クソバカチビ猫——」

「変なこと考えるからいけないんです。せつかくロマンチックな気分だったから、もう少し浸っていたかったのに、リゼのバカ」

「ごめんなさい！」

「ただ謝ってもだめ」

「やっぱり土下座？」

「そうじゃなくて」

『『そうじゃなくて』、なにっ？』

リゼはチビクロから逃げまわりながら叫ぶ。

逆光で影になった紅緒の顔は、リゼには見えなかった。でも口元に手をあてて、軽やかな笑い声と共に風に運ばれてきた言葉は、心が和むものだった。

「ここにある薔薇の数だけ私に好きって言ってくれるなら、許してあげます」

二

豆と地鶏をグツグツと煮込んだ郷土料理で夕食を済ませてから、王宮へと向かった。

かなり夜が更けてから到着したので、国王夫妻には翌日挨拶することになり、リゼと紅緒はそのまま客室に通される。部屋は一緒か、それとも別々がいいかとはじめに訊かれたリゼは、正直なところ返答に迷った。が、紅緒がこともなげに「一緒でいいです」と答えたので、内心ギョツとする。部屋に通されてすぐに、お風呂に入ってさっぱりしようということになった。リゼが王宮の大浴場で湯につかっていると、出発前ルシターに言われたセリフが脳裡をよぎる。

——知らない土地で二人きりの夜。盛り上がるぜえ？

途端によからぬ考えで頭がいっぱいになり、あやうく溺死するところだった。

のぼせてふらふらになりながらもリゼが部屋に戻ると、紅緒も既に風呂から上がっていて、鏡台の前で肌の手入れをしていた。

湯上りの姿なんて見慣れているはずなのに、なぜ新鮮に映るんだろう。異国の地だからか？ すっぴんも濡れた髪も細い襟足も、すべてが色っっぽい。

リゼは理性がぐらつくのを感じた。まずい。抑えが利かなくなりそうだ。でも、いまならまだ聞

に合う。正気を保っているうちに、早くこの場を離れよう。

できるだけ紅緒を見ないように首を横に向けたまま、リゼは扉までそろそろと後退する。そして、ボソリと紅緒に声をかけた。

「あのさ、僕、やっぱりガロに会って来る。ベニオは先に休んでいて」

紅緒の返答を待たず、リゼは逃げるように部屋を後にした。

リゼが研究室を訪ねると、扉を開けた二番弟子のガロ・ファニーノはリゼの顔を見て驚いたように固まった。ついで眼元を陰しくし、開口一番「ずいぶん早いご到着で」と嫌味を言った。それから身体を引いてリゼを中に通し、ボタンと扉を閉める。

「どうぞ」

ガロは、リゼが椅子に座ったのを見計らい、魔法ではなく手ずから銘酒を注いで杯を渡してくれた。「お元氣そうでなによりです」

丁寧な口調だが、どこことなく拗ねた態度だ。立ったままのガロに椅子を勧めたが、断られてしまう。ガロは腕を組んで作業台に寄りかかり、リゼを見ようとしない。

リゼは辛口の酒を啜りながら、ガロの様子を眺めた。痩せぎすで頬はこけていて、顔色が悪いのは相変わらずだ。口数が少なく愛想もない。見るからに陰気でとっつきにくそうな風貌をしている。事実、ひとつきあいは不得手で研究一筋。用がなければ研究室から外に出ないという、典型的な隠遁者だった。

「相変わらず引きこもっているのか？」

「研究熱心と言ってください」

「おまえはひとつのことに没頭しすぎなんだ。何度それで飢え死にしかけたと思ってる。いいかげん、その『倒れるまで続ける』姿勢を改めろ」

ガロは研究に没頭するあまり、餓死寸前まで飲まず食わずの生活を続けることがよくあった。

何度、危ういところでリゼが気づいて救出したことか。一度などひどい脱水症状で死の淵をさまよったこともあるくらいだ。

だがいつもガロはまったく反省の色を見せない。今回もムスツとした口調で「こういう性分なんです」と開き直った。ああ言えばこう言う。よほどへそを曲げているようだ。

リゼは深くため息をつき、口調を和らげて問い質した。

「僕を待っていたのか？」

「ええ、ずっと。あなたがこちらに向かったと、出発直後にラヴェルから連絡があつたので」

なるほど、と納得する。ラヴェルは口うるさいが、根まわしやフォローが上手くてなにをするにもそつがない。

「待たせて悪かった」

リゼが素直に詫言ると、ガロの機嫌がやや直ったようだった。

「もつといかがです？」

穏やかな表情でいそいそと傍に寄ってきて、おかわりを注ぐ。リゼの杯を満たすと、次は酒の肴

の用意をはじめた。

それから互いの近況を語り合う。ガロは、リゼが紅緒の世界へ赴くためこちらの世界と向こうの世界の境界を越えたときの様子を知らなかった。他にもルシター・スニと一戦を交えたときの状況や、紅緒との出会いや同居生活のことまで興味が尽きないようで、リゼは彼に問われるまま長い時間喋り続けた。ガロは聞き役に徹し、杯は空になることなく夜は更けていった。

まもなく曙光が射すという頃になって、ふと、ガロは悲愴な顔つきになった。

それまでのほろ酔い状態が嘘のように、思い詰めた眼でリゼをまっすぐに見る。

「……いつからです？」

リゼは杯の縁越しにガロを見つめた。

ガロの、主語を省いた曖昧な問いがなにを意味しているのか、リゼにはすぐに察しがついたのだ。

「……どうしてわかった？」

リゼが質問に質問で返すと、ガロは露骨に顔を顰めた。

「いやでもわかります。このことをベニオ様はご存じなのですか？」

「……まだ言ってない。この件についてはベニオもかなり気にしていたし、色々悩んでいたようだから、『時間』についての問題が解消されたこと自体は喜んでくれるはずだけだ……」

リゼは天井を仰いで大きく深呼吸して、ぶっきらぼうに答える。

まさにこしばらくのあいだ、ガロが低い声で告げてきた『このこと』について頭を悩ませていたのだ。